

奇妙な夢が頭の中にどっかり腰を据えてしまうと
この世にそれ以上確かで真実の話はなくなってしまった

セルバンテス

この誇り高き案山子男
勇気ありあまり

セルバンテス

二〇三〇年、十一月三日、午後二時半。

郷田狂介は（未来計画カンパニー十三階）開かずの間の前で、荒野大三郎を待ち伏せしている。

麻暮正作は（未来計画カンパニー一階）非常口の前で、荒野を待ち伏せしている。

（さあ、丁か半か、愉しみだわ。

荒野大人、どういう動きをするかしら）

しかし郷田も、荒野が蝶子をおいて逃げると確信している。

（荒野大人の始末は、麻暮さんにおまかせするしかないわ）

だが見当はずれた。

オヤ郷田サン、の声で振り返ると、

「コンナトコロデ、オ会イスルトハ」

黄金仮面が目の前にあった。

郷田はレーザーガンを使おうとしたが、使う間もなく、荒野の黄色いペンでその場に崩れ落ちた。

荒野が郷田の軀を引きずって新居に入っていくと、

「もう時間がないわ、すぐ逃げて」

蝶子が叫んだ。

荒野は落ち着いた声で、

「アナタハ、マダ麻暮サンヲ御存知ナイ。

アノ正義面ヲシタ偽善者ヲ。

麗子サンノ従姉デアル蝶子サンヲ、麻暮サンガ殺スワケハアリマセンヨ」

「なら、私は」

「ソウ、騙サレタダケデス」

「でも、あのふたりは、あなたの命を狙っている」

「ソレモ、心配アリマセン。

郷田サンハ、イマ眠ラセマシタ。

麻暮サンハ、ロボットガードマンニ、イマゴロハ梃摺ッテイルコトデショウ」

さすがは私の旦那さま、と云いながら蝶子は、小部屋から出て来た。

「全部読めているのね」

べつだん卒倒もしなかった。

蝶子は荒野に抱きついた。

「でもどうしてあんなクスリを作ったの」

蝶子がきつい声で聞いた。

「アレハ川上ガ、勝手ニ作ッタノデス。

川上ノ製造所ハ地下三階、蝶子サンノ意向ニヨル私ノ製造所ハ、地下二階ナノデス」

荒野は宥める調子で答えた。

「郷田さんのことはどうするつもり」

蝶子はまた聞いた。

今度は普段の声に戻っていた。

「元秘書ガ郷田サンニ、酷イ目ニ遭ッテイマスカラ、彼ニ身柄ヲ預ケルツモリデス」

「そんな。

郷田さんは、旦那さまの命の恩人じゃありませんか」

「ソレハソレ、コレハコレ。

元秘書ハ、両手ノ指ヲ、全部切り取ラレタノデスヨ。

私トシテハ、ソウスルシカアリマセン」

断固とした荒野の言葉に、蝶子は押し黙った。

丁度そのとき、麻暮はロボットガードマン相手に闘っていたものの、ロボットに七首は通用しない。

麻暮は奮戦したが、両腕を砕かれ、次は両足を砕かれる寸前に、助け舟が入った。

竹田金之助だった。

金之助は手にした金棒で、ロボットガードマンを烈しく打ち据え、瞬く間に破壊した。

麻暮先生、と金之助は気遣った。

「大丈夫ですか。

さあ、ともかく逃げましょう」

「郷田さんが十三階にいる。

逃げるわけにはいかない」

麻暮は階段を駆け登る仕草をした。

しかし金之助は強引に麻暮を外に引っ張り出した。

「十三階に戻ったら共倒れ必至です。

それにこんな腕でどうしようと云うのですか。

添え木したって動くとは思えません。

ここはひとまず引き上げて対策を練りましょう」

「くくく」

激痛を恠えつつ麻暮は渋々、金之助のクルマまで一応引き上げた。

「金之助さんはいったいどうして」

ビルの十三階を見上げ、まだ戻る気のまま麻暮が聞くと、

「親父の金助が、麻暮先生にどうしても会いたいと云うもんですから、一緒に郷田邸にやってきました。

そして麗子さんから、今日の決行を聞いたのです。

自分は親父の命令でここにやってきたわけです」

麻暮は自分のことを棚に置いて、金助の健康が心配だった。

そして金助さんは、と麻暮は聞いた。

「いまどこにいるんですか」

「郷田さんの家で麻暮先生の無事の帰還を待っています」

やはりひとまず引き上げるしかない、と麻暮は決めるしかなかった。

二〇三〇年、十一月三日、午後四時。

荒野は、未来計画カンパニーの地下二階で川上と対話している。

「ドウカネ。

新薬ノ製造状況ハ」

荒野は、多数の真新しい機械と、多数の真新しいロボットを眺めながら言った。

荒野さま、と川上は力強く答えた。

「B3Fで作っていたドラッグは、今度の〈D2号〉に比べれば、まあダミーみたいなものです。

今度のドラッグは人類壊滅どころか、ゴキブリだって生存はできなくなるでしょう」

「ソレハ、頼モシイ。

アトハ、地下二階ノ警備ノ強化デスカネ」

「主導はデータチップではなく、ウォーター・パワーですからね。

この地球に水が一滴もなくならないかぎり動きます。

今度はさすがの郷田探偵だって、どうにもできません」

郷田サンハ、と荒野は厳かな声で言った。
「イマゴロ、元秘書ニ、両手両足ノ指ヲ、落トサレテイル頃デス。
デスカラ、ドウニモデキマセン」

郷田は地下三階に居る。
鎖に繋がれ、元秘書の罵声を浴びている。
郷田はうんざりして、
「うるさいわねえ、あんた、五月の蠅みたい。
あたしに、何をやる気なの。
荒野大人から、どうしろって云われているのよ」
元秘書は指のない拳を突き上げる。
「目には目を、歯には歯を、指には指を」
元秘書はロボットのガードマンに命令する。
ガードマンはナイフを手にして郷田に近づく。
「こんちくしょー」
郷田はもがくが、鎖はまったくゆるまない。
金縛りとはこのことね、と郷田は思う。
元秘書がほくそ笑む。
ロボットが郷田の右手を掴む。
掴むやいないや、まず小指を切り落とす。
郷田は泣き叫ぶ。
「泣け、叫べ、泣き叫べ。
人間が指を失うとは、どう云うことなのか、身をもって知るがいい。
この糞ったれちゃん。
小便もらさないようにしなよ」
痛みと痺れを感じつつ、
(聴いたことのある台詞ね)
と郷田は思う。
前に自分が云った言葉だとは思われない。
ロボットは郷田の他の指も次々と切り落とす。
血潮が吹きあがる。
ロボットがこんどは郷田の左手を掴む。
「ぎゃー」

叫び声とともに郷田は夢から覚醒した。
「あら、あんがい早く起きたのね」
蝶子の声だった。
郷田はガードマンロボットに背負われて、駐車場においたBMWの近くにいた。
慌てて手を確認したが、指は付いていた。

あんたが、と郷田は聞いた。
「助けてくれたのね」
「まあ一応」
と蝶子は素っ気なく答えた。
「あんたみたいな厭な女がどうしてよ」
憎まれ口をきくと、
郷田さんは、と蝶子はやはり素っ気なく答えた。
「荒野さんの命の恩人だから。
これでおあいこにして」
郷田はロボットの背から降りると、愛車に乗り込み、
「じゃあね、サンキュー」
と手を振って去った。

「手を振ってましたね。
みすみす逃がしていいんですか」
地下二階で監視カメラ画面を視ながら、川上が苦笑まじりに云った。
郷田サンハネ、と荒野は静かに答えた。
「麻暮サンニ比べれば、我々ニトッテ、危険人物デハアリマセン。
ソレニシテモ蝶子サンハ、予想通りノコトヲシテクレル人デスネエ。
憤死スルデショウカラ、元秘書ニハ、コレヲ見セテハイケマセンヨ」
彼なら、と川上は云いにくそうに云った。
「すでに憤死しました。
あのダンディーなスタイリストには、指なしの自分が耐えられなかったのしょう」
「義指ヲ、作ッテアゲタノデスヨネ」
「義指の自分も耐えられなかったのしょう」
私ノ、と云って荒野は深く息を吐き出しつつ、
「黄金仮面ノ下ノ顔ヲ、見セテアゲレバヨカッタ」
「そうになると、ああいう気の優しい男は、憤死ではなくショック死しますよ」
川上が真面目な顔で云うと、
「ソノ事ヲ事前ニ、蝶子サンガ知ッテイタラ、郷田サンヲ単純ニ逃ガシタカネエ。
ドチラニシテモ、可哀相ナコトヲシマシタ」
荒野は掌を合わせ瞑目した。

二〇三〇年、十一月三日、午後五時半。

郷田邸の応接間にて、帰還した麻暮と、待機していた金助は対談を始めている。

麻暮はソファに腰掛け、麗子に手当てしてもらった両腕を膝の上に置いていた。両腕は、添え木をして繃帯で巻かれ、その上に氷嚢を乗せていた。

自分ではまったく動かさなかった。

金助は例によって車椅子だが、麻暮とは距離を置き、車椅子の後ろに金之助が控えている。

麻暮先生、と金助は呼びかけた。

(そしてさっき云ったことを繰り返した)

「あっしは、このまま未来コスモス院で朽ち果てるのはご免です」

金助さん、と麻暮も呼びかけた。

(そしてさっき云ったことを繰り返した)

「金之助さんが出所してから、それは云わない約束だったでしょう」

「息子は息子、親父は親父でやんす。

ここ数年、師匠が酷い目にあっているのに、施設で歯噛みするだけの日々、子分としてこんな屈辱はありやせん

麻暮先生、この金助、もう一花咲かせないと、死んでも死にきれやせん」

「そんなら死ななきゃいいでしょう」

「それはそうですが、あっしには己の死期が見え始めて来ているんで。

荒野退治の最後の仕事、この金助にやらせてくたせえ」

金助は涙目で麻暮を見た。

麻暮も複雑な感情をこめた眼で金助を見た。

「しかし親父さん、この軀で、どうやって」

金之助が後ろから声をかけると、金助は振り向かずに麻暮に笑いかけた。

「これはただの車椅子じゃありやせん。

一昔前の麻暮先生の車椅子、それと同等の装備、いやそれ以上の装備が、ようやく整いつつあります。

あと一ト月足らずで完成するはず。

この開発もみな最後の一花のため」

麻暮は、動かさない腕を動かしてでも、金助の思いを変えさせたかった。

このとき郷田が戻って来た。

「やあ、みなさんお揃いで」

明るい声をかけたが、その全身には疲労感が漂っていた。

郷田さん、と麻暮は安堵の声をかけた。

「心配していましたが、無事でしたか」

「麻暮さんの方は無事ではなかったようね」

郷田は麻暮の腕を見ながら云った。

云ってから、自分もこういう状態になっていたはずだと考えると震える気分だった。

蝶子に借りができたとも思った。

郷田は子細を話す元気も出ず、キッチンに行くと冷蔵庫から缶ビールを取り出して一気に飲んだ。

それから、麻暮の横に坐るとソファに凭れて眼を瞑った。

すぐに微かな鼾が聴こえ始めた。

金助は声を落とし、話を続ける。

「未来コスモス院のあっしの部屋の窓から、海岸の松が三本見えやす。

今日の夕陽は、あの松の何本目のところに沈むだろう。

昨日はあのへんだったけれども、今日はあのあたりじゃないか。

明日は、明日は、明日は、あっしの代わりに金之助に見てもらおうことになるかもしれん。

麻暮先生、小林金助の末期はこれでよろしいのでしょうか。

麻暮先生、小林金助の末期はこれでよろしいとお思いでやんすか」

麻暮は金助の表情を凝視した。

おおよそ七十年間、麻暮の手足として働いた金助の。

「解りました」

麻暮は静かに云った。

「親父さん、自分もお伴します」

咄嗟に金之助が云うと、

「お前には、麻暮先生を守ってもらわにやならん」

と金助は諭す声で云った。

二〇三〇年、十二月一日、午前十時。

小林金助は、息子金之助の電気自動車に乗って、未来コスモス院から未来計画カンパニーに向かっている。

この日の決行に就いて金助は、金之助にも固く口止めをしていた。

十日前から、ドラッグ〈D 2号〉が銀座、渋谷、新宿、池袋などの都心で売買されているとの噂が、見ず知らずの面会者たちの口を通じて、金助の耳に入っていた。

噂では〈D 2号〉の威力は半端ではなく、一回使用してしまうとだれにだって止められず、丁度十回の使用で死亡、(呪術なんかする必要もなく)即完全にゾンビ化してしまうとのこと。

だが(湘南ではないことから)まだおそらく麻暮や山風や郷田には伝わっていないだろうと踏んだ金助は、一日も早く決行しなければと考えていたのだ。

例年より早く湘南に初雪が降った。

金助はひとりで行くつもりだったが、深夜から降りはじめた雪がやまないので金

之助にクルマで送らせた。

「その後、麻暮先生の怪我の回復具合はどうかね」

金助は聞いた。

金之助は前を向いたまま、

「幸いなことに順調です。

一時はもう腕が使えなくなるんじゃないかと心配しましたが、だいぶ戻りつつあります」

金助は安堵の溜息をひとつしてから、

「麻暮先生を頼んだぞ」

とひとこと云った。

それから麻暮宛の封書を金之助の懐に入れた。

「解っています」

金之助もひとこと力強く云った。

それからはふたりとも無言だった。

金之助は、懐の封書の中身を聞くこともしないで、黙って運転していた。

聞かなくても遺書であることくらいは解っている。

江ノ島大橋の手前で電気自動車を止めさせ、金助はそこで降りると、自動車椅子を使って慎重に橋を渡りはじめた。

外へ出るなど金助に命じられた金之助は、降る雪のなかを金助の姿が見えなくなるまで、電気自動車の運転席から見送った。

未来計画カンパニーに着いた金助は、堂々と正面玄関から入って行った。

受付のロボットが対応する。

「社長ハ只今、外出シテオリマス」

そうではない、と金之助は云って、荒野との面会を求めた。

受付のロボットが何もしないのに、天井の方から、プフイ、と荒野の声がした。

「金助サンデスネ、オ久シ振り。

コノビルハ、バリアー・フリーデスカラ、心配ハ要リマセン。

十三階デ、オ待ちシテイマス」

案内用のロボットに断わり、金助はひとりでエレベーターに乗った。

開かずの間は扉が開放されていて、車椅子の金助が入って行くと、荒野と蝶子と家政婦ロボットが出迎えた。

「寒カッタデショウ、金助サン。

マズハ熱イコーヒーデモ、入レサセマショウ」

荒野は家政婦ロボットに命じた。

「ついでにホットケーキもね」

蝶子が云うと、金助は改まった口調で、

「初めまして、と云ってもあっしは、荒野にのっとられたあんたに遭ってはいるん

ですがね。

「あっしは小林金助と云うケチな野郎でござんす」

「金之助さんのお父さんでしょう。」

「麗子に聞いていたわ」

「すかさず金助は、用意していた言葉を放つ。」

「その麗子さんが、江ノ島大橋のたもとのクルマのなかで待っていますけれど。」

「ホットケーキは後にして、行ってくれますか」

「麗子には絶交されたかと思っていたけど」

「まあ、絶交も交のうちですからねえ。」

「麗子さんも身重で、従姉さんに相談があるとのことですよ」

（私と同じだなんて、相変わらずつきあいがいい子なこと）

「そんなら、メールでもすればいいのに」

「蝶子が綺麗な顔をわざとふくらますと、」

「いまやご主人である麻暮先生に気づかれたくないとのこと、あっしが言付かってきやした」

「咄嗟だったが、自分にしては上手く云えた、と金助は思った。」

「麗子が麻暮さんと」

「蝶子には想定外の気もしたし、想定内の気もした。」

「信じられませんか」

「金助は別の嘘をつこうとしたが、」

「信じられますとも」

「蝶子はそう云うと、荒野に会釈をただけで部屋を出て行った。」

「その後ろ姿を見送ってから、荒野は金助に笑いかけた。」

「プフイ。」

「金助サンハ女性ニ優シイ。」

「嘘ヲ云ッテ、蝶子サンヲ助ケマシタネ。」

「御礼ヲ云イマス」

「金助は身構えて、」

「荒野、覚悟、地獄へゆけ」

「プフイ、と荒野はまた笑った。」

「マア、ソウ急ガナイデ。」

「私ダッテ、末期ノコーヒークライ飲ミタイ。」

「サア、貴方モドウゾ」

「家政婦ロボットが入れたコーヒーを勧めた。」

「もちろん金助は口をつけなかった。」

「サスガハ金助サン。」

「コノコーヒーニハ、〈D 2 号〉ガタップリ。」

「ナンテコトハアリマセンヨ。」

「プフイ」

荒野はなぜか愉しそうだった。
金助は荒野がコーヒーを飲み終わるのを待った。
「末期の味はどうかね」
金助が声をかけると、荒野はやはり愉しそうに、
「味ナンカシマセンヨ。
ナゼナラ、金助サンニ殺サレタ、部下ノ顔ガイクツカ映ッテイルモノデスカラ」
荒野はカップのなかをのぞいた。
金助は再び、荒野、と叫んだ。
「おまえも、そこに映ることになるぜ」
そして車椅子の把手のボタンを押した。
車椅子は爆発し、車椅子から飛び出した数個の爆弾が天地左右をも破壊した。

二〇三〇年、十二月一日、午前十一時四十六分二十五秒。

郷田は鶴沼の自邸の居間に居る。
江ノ島の方角で小さからぬ爆音を聞いた。
(やったわね、金助さん)
すぐさま郷田は、雪が積もり始めている屋上に駆け登り、備え付けの望遠鏡で江ノ島方面を視た。
粉雪が赤く燃え、黒煙が天に昇っていた。
未来計画カンパニーの巨大なビルが、すでに崩壊しているのは、明白だった。
自爆テロのこんな映像をかつて見た気がした。
(荒野大人の、最期)
虚脱した気分で見間に降りると、丁度金之助がやって来たところで、麻暮と麗子が出迎えていた。
麻暮先生、と金之助は興奮した声で告げた。
「親父が、遂にやりました。
遂にやりましたよ、親父が、親父が。
先生、誉めてやってください。
小林金助の最後の偉仕事を。
荒野大三郎は、未来計画カンパニーと共に壊滅しました」
麻暮は沈痛な面持ちで何も云わなかった。
代わりに麗子が、金之助さん、と声をかけた。
「お蝶さんは、お蝶さんは。
お蝶さんもあのビルに居るはずですけど」
金之助はほんの一瞬だけ云い淀んだが、
「大丈夫です、大丈夫のはずです」

「どうして大丈夫なんですか」

「どうしてって、親父の金助は、女性に対しては決して危害を加えませんから」

「そんな保証はあるんですか」

「自分が保証します」

「でも、でも」

このときようやく麻暮が口を開く。

「麗子、金之助さんを追い詰めてはいけません。

たったいま金之助さんは金助さんを失ったんですよ」

「きっと、自分は、失ったんじゃないありません。

きっと、自分は、得たのです」

云いつつ金之助はその場に泣き崩れた。

泣き崩れたまま、懐から麻暮宛の封書を取り出した。

麻暮は受け取ったが、大怪我の後遺症かどうか、指先が震えてそれを開けなかつた。

代わりに麗子が開いた。

それから麗子は、下手な手書きの文字を、苦勞しつつ静かに読み上げた。

【わたし共にもやがて最後の時が来て

この人生と別れるなら

願わくば有難うと云って此の人生に別れましょう

灰色の粉雪しちむつかしい顰っ面の迷い雲

雪は下界のあらゆる聴覚をさえぎり

老と沈黙と追憶の

ひとりぼっちの古美術展覧会

ああ世の聾の老博士、無言教の寡婦さん

子に先だたれた愁傷な親御達

あなた方の悔いや嘆きもさる事ながら

願わくば死ぬ時この人生にお礼を云って御いとま乞いをして下さい

それはたしかに人生に対する寛容の美德です

悪に報いる金色の光り放つ善です

生はそれぐらい気位高く強く明るく

情熱をもって

鏡のごとく果つべきです】

「これは、金助さんの」

麗子がつぶやくと、瞑目しつつ聞いていた麻暮は、つと眼を見開いて天井を仰ぎ、

「そう、遺書ですね、あるいは遺書の代わりですね。

福士幸次郎と云う詩人の詩で、昔から金助さんは、これをよく暗誦していました」

郷田がテレビをつけた。

瓦礫と化した未来計画カンパニーを背に、粉雪降る江ノ島大橋のたもとで、美々社長がキャスターのインタビューを受けていた。

その斜めうしろに、数人の野次馬に混じって、憔悴しお腹の張った蝶子の姿が映っている。

二〇三〇年、十二月十日、午後十時。

崩れ落ちた未来計画カンパニーの地下二階に、荒野と川上が居る。

ロボットたちがドラッグ〈D2号〉を製造管理をしている。

「ビルを崩壊させても、地階がまったく無傷なのを、麻暮が知ったら気落ちするでしょうね」

川上が云った。

プフイ、と荒野が笑った。

「麻暮サンニトッテハ、想定内デショウ。

気落ちナンカスル人ジャアリマセンヨ。

アノ世ノ金助サンハ、気落ちシテイルデショウガネ」

「それにしても荒野さま、よくご無事で」

「爆破モ想定内デスカラ、新居ハ、トーチカ風シェルターニナッテイマス」

「しかしビルが崩れ落ちたのですから、いくらシェルターだって十三階から落下するでしょう」

「簡単ニ云イマストネ、落下傘付キナンデスヨ」

「いやはや、荒野さまには恐れ入りました。

それなら蝶子さんを逃がす必要はなかったのでは」

「ソレハ私ガヤッタコトデハナク、金助サンガヤッタノデス。

デモ蝶子サンニハ当分ノ間、私ガ死ンデシマッタト思ッテホシイ。

ソノホウガ、無事ニ出産デキルデショウ」

荒野は苦々しい声で云った。

「そうですか、そうですね」

「ソレヨリモ、〈D2号〉ノ効果ハドウカネ」

「今回は湘南はやめて、銀座、渋谷、新宿、池袋などの都心と札幌、仙台、名古屋、福岡などの地方都市で展開しています。

かつて荒野さまが京都遷都を提唱していますので、京都と、それに近い奈良、大阪は一応避けております。

それでも年内には、ゾンビが溢れていることでしょう。

ネットでの売買も盛んですが、もともと〈D 2号〉は大変に高額ですから、貧乏人には買えません。

まともな人間は貧乏人のみになってしまうでしょうから、とりあえず日本崩壊は時間の問題です」

「ソレデイイ、ソレデイイ」

荒野は満足そうに頷いた。

「けれども、ひとつ心配があります」

「麻暮サンノ動キカネ」

「いえ、麻暮の師匠の陽羅と云う死に損ないが、〈D 2号〉撲滅キャンペーン、及びゾンビ退治作戦を開始したとの噂がネットで」

「プフイ。

ソレハ噂ニスギナイカモシレマセン。

手前味噌デスガ、アノ人ガアノ容姿デ、活動ガデキルトハ思ワレマセン。

マルデ、ゾンビガゾンビヲ、退治スルヨウデハアリマセンカ」

だが荒野は、川上に即座に命じた。

福島へ行って陽羅の様子を調べることを。

二〇三〇年、十二月十日、午後十一時。

麻暮は郷田邸の居間で、郷田、金之助と三者会談をしている。

「〈D 2号〉の猛威は凄いものがあります。

ゾンビになると知って〈D 2号〉をやめられないのだから、困ったものです。

このままでは、收拾がつかず、遠からず日本国中ゾンビだらけになってしまいます。

ごぞんじのように、日本政府は薬物に甘過ぎますからね。

まだ湘南にはゾンビはやってきていませんが、いずれ自分たちだってゾンビに狙われるでしょう」

銀座まで視察に行った金之助が報告した。

「と云うことは、荒野大人も川上も無事だったってことね。

あの世の金助さんが知ったら、ショックでしょうね。

と云うことは、あたしたちが退治する相手が膨大にいるってことね。

もはや、荒野大人や川上をやっつけたって駄目ってことかしら」

郷田は困惑の表情で云った。

いいや、と麻暮が首を振った。

「荒野のことだから、ゾンビを元の人間に、少なくとも普通の死者に、戻せるクスリも開発しているかも。

それを発見して、ヘリコプターから散布するって方法が残されているんじゃない

かな。

ボクは金助さんの死が、無駄だったとは思っていませんよ。

なぜなら荒野の活動範囲はもはや、崩壊したあのビルの地階に限られているんですからね」

「そうです、その通りです」

安堵の表情で金之助は云った。

ボクたちは、と麻暮は云った。

「まだ諦めてはいけません。

金助さんのためにも、最後まで戦わなければなりません。

明日にでも地階に潜入して、荒野を捕らえることがゾンビ退治に優先するでしょうね」

「自分もそう思います。

潜入は自分がやります」

金之助が手を挙げると、

「いくら瓦礫の下だからって、地階はあたしも詳しいのよ。

こんどは絶対に失敗しないから」

郷田も手を挙げた。

それでは、と麻暮が云った。

「ボクも行きます。

ボクたちの仕事も最終段階に入っていますからね。

ただし、地階を破壊してはなりませんよ。

ゾンビを元の人間に戻せるクスリを、開発している可能性がありますからね」

鉄仮面の奥の口元が微笑んでいた。

「もしもそれが見つかったら、ヘリコプターは山風さんに頼みましょうね。

あの人の仕事も最終段階ですもん。

忍び込む直前に伝えるわね」

郷田が空元気を出して云った。

「それでは明日朝、ラッキーセブンの七時出発と云うことで。

湘南の天気予報は快晴、気温平均七度。

準備を整えて、夜食をとって、仮眠も忘れずに」

麻暮の言葉に、郷田と金之助は声を揃えて、おう、と云った。

二〇三〇年、十二月十一日、午前三時五十五分。

川上は、福島陽羅のあばら家が見える位置にクルマをとめている。

荒野の命で即刻やってきたが、道路が空いていたので予定より早く着いてしまったのだ。

クルマのフロントガラスから、遠くあばら家を眺めると、灯りが点いていたが、時間を考えれば躊躇せざるを得なかった。

相手の心象を害して門前払いを食わされれば、荒野に顔向けができない。

寒風のなか、枯れた雑草、雑草、雑草ばかりの荒地に踏み出すことも厭だったので、クルマのなかで二、三時間待とうと思っていた。

すると、あばら家から襤褸雑巾と見紛う風体の小さな人間が出てくると、こちらに向かって大声を放つ。

「川上宙門だな。

そんな暗いところに立っていないで入れ」

どうして自分の名前を知っているのだ、と川上はそれだけで気押された。

川上はクルマを降りると、寒風のなか、枯れた雑草、雑草、雑草ばかりの荒地を百メートルばかり歩いた。

おもむろに歩を進め、開いている玄関を潜って、あばら家の土間に入ると、

「わしが陽羅だ。

待っていたぞ、川上」

と云われて益々気押された。

近くで見るその姿は、言語を絶するものであった。

顔は、仮面を取った荒野よりも醜く爛れ、〈白髪三千丈〉はシミだらけのタオルで縛られている。

手足はぬかるみを這って来たふうに汚れ、蚊や蚤や百足に食われた部分は赤かった。

小柄すぎる振れた身体は、布切れで包まれている。

川上は、これほど見窄らしく、汚く、醜い人間を、いままで見たことがなかった。

その周りには喀いたばかりらしい、鮮血が浮いていた。

「寒かっただろ。

さあ、飲め」

川上に茶碗を渡し、温めた焼酎を注いだ。

「腹もへっただろ。

さあ、食え」

積み上げた書物の頁の間に栞代わりに挟まっている、するめに似たつまみを、川上の目の前に突き出した。

「美味しそうですが、何ですか」

川上はお世辞を云った。

「庭をうろつく、放射性物質まみれの蝦蟇よ。

つぶして、焚火で焼いたもので、滋養満点だぜ」

川上は吐きそうになって、

「ぼ、ぼくは遠慮いたします」

「蝦蟇より青大将がいいのか」

「ど、どちらも遠慮いたします」

「ならば、ゾンビの丸焼きはどうじゃ」

「ゾ、ゾ、ゾー」

「そうじゃ、ゾンビはいいな。

ゾンビは噛みつけばみんな仲間にできる。

麻暮がわしの元を去って、かれこれ七十余年、わしは、わしは、グスン、わしは
独りっきりじゃ。

だれも寄りつかん、だれも仲間になってくれん。

どうじゃ川上、わしとオトモダチにならんか」

「そんな、恐れおおい」

「ならば、ゾンビの丸焼きを食え。

そんなに不思議がらんでええ。

仙台から一匹、はぐれゴキブリさながら迷いこんで来てのう。

こりゃええオトモダチが来た思うたら、放射能に弱いんかのう、家の前で息絶え
た。

それで折角だから、保存食として丸焼きにしてある」

「ぼ、ぼくは遠慮いたします」

「なにをほざくか。

お前たちが作ったゾンビじゃろ。

それが食えんで、いったい何のためにこんなに沢山のゾンビを生み出したんじゃ」

「それはその、とにかくゾンビだけのご勘弁ください」

「哀れなゾンビよ、産みの親からも見放されたか」

「何と云われましても」

「ならば、ゾンビ抜きで飲め、ゾンビを飲むつもりで飲め、一気呵成に飲め、死ん
だ気で飲め、ぶっ倒れるまで飲め」

「あ、はい、はい」

川上は茶碗の焼酎を一気に飲み干した。

「安い焼酎のなかでも一番安い、〈黒ダルマ〉だ。

凡百の作家は、焼酎を焼酎と書く。

焼酎は、芋と麦の違いくらいは書かなきゃあかん。

ビールをビールと書く奴は、犯百よ。

だいたい生と瓶とは違いすぎるし、キリンとカバとサイの同じところは、動物園
にいるってことだけさ。

もっとひどいのは、ウイスキーを酒と書く奴よ。

ブランデーの赤と黒は似ているが、焼酎の〈黒ダルマ〉は、〈赤ダルマ〉とは、
まったく違う。

味が違うのではなく、飲む奴の嗜好や思考や志向が、まったく違うのさ。

煙草もわしは、〈キャッチャー・イン・ザ・ライ〉を吸っておるが、〈イン・レイ
ト・スタイル〉を吸っておる奴の気が知れぬ」

睨まれた川上は狼狽えて、

「あの、その」

「つべこべ云わず、もう一杯飲め」

注がれた茶碗の焼酎を、再び川上は一気に飲み干した。

「旨い、です」

「その調子じゃ、男ならもう一杯いけ。」

「いったら、踊れ、歌え」

云うが早いか、歌いながら踊り始めた。

あるいは、踊りながら歌い始めた。

素頓狂な節をつけて、頓珍漢な声で。

あるいは、頓珍漢な節をつけて、素頓狂な声で。

繰返し繰返し何度も何度も。

鮮やかだった血溜りは、完全に渴き、すでに赤黒く変色している。

ホラホラこれがわわしの血じゃ
ゲホゲホゲホと飛びだしたじゃ
ホイ命をけずる血のしぶきじゃ
ボロンボロンと死んでゆくじゃ
あいつもこいつも死にゆくじゃ
ダダダれが例外と云うのかじゃ
この世はぜんぜんかなわんじゃ
あの世にまったくかなわんじゃ
人生いろいろごかつまらんじゃ
ホイでもわしはかまわんのじゃ
ナンでもわしはかまわんのじゃ
つまらんもんはかまわんのじゃ
かまわんものはつまらんのじゃ
拘泥したれど無意味があるじゃ
感染したれど有意義がないじゃ
ケケケケツほどもあるないじゃ
プフイフイちもつあるないじゃ

川上は焦れて来て、大声で、

「あの、その、その、あの」

「なぜに一緒に歌わんのか」

「ぼくは音痴でして」

「なぜに一緒に踊らんのか」

「ぼくは踊痴でして」

「幼稚な答じゃのう」

川上はまた大声で、

「あの、その、その、あの」

「うるさいから、もうやめた」

「すみません、お聞きしたいことが」

「そんなことは、云わんでも解っておる。

だがそれは、お前の問いではなく、荒野の問いじゃろ」

「それは、まあ」

「まあいい。

要は〈D 2号〉撲滅キャンペーン、及びゾンビ退治作戦を、わしが開始したかどうかを聞きたいんじゃない」

川上は呆れつつ恐れ入りつつ、

「は、はい、その通りでございます」

とにかく答だけ聞いて、この厭な臭いの充満する部屋から、もう逃げたかった。

「それはな、わしではなく、お前がこれからやることじゃ」

「ぼ、ぼくが、や、やる、こと」

「よいか、川上。

お前はいつまで、荒野の奴隷、荒野の傀儡、荒野の太鼓持ち、荒野の糞拭きになっているつもりなのだ。

お前は天才的な科学者だ。

荒野よりも優れた能力を持つ者じゃ。

よいか、川上。

なぜにお前は、宙門なのか。

お前の父、川上宙衛門が、宙の一字を授けたのみの話ではないぞ。

愛息のお前に、宇宙を拓く門たる存在になってほしい一心で、宙門と名づけたのじゃ。

地球を壊滅させる陰謀の片棒担ぎ、肥やしの片棒担ぎになってもらいたかったわけではない。

よいか、川上。

いまこそ、父の遺志を継いで、地球を、宇宙を救うのじゃ」

川上は一切躊躇わず、

「解りました。

して、ぼくは具体的に何をすれば」

「阿房か。

荒野と蝶子と美々とお前だけのために、お前は〈D 2号〉の効果を消滅させるクスリも製造しておるじゃろ。

それをヘリコプターで散布せよ。

未来計画カンパニーが所持している、ヘリコプター及びロボットパイロットを総動員せよ。

宇宙のために、他人のために、お前がやるべきこと、お前だけがやれることを、為せ」

「はい。

〈Dマイナス2号〉をヘリコプターで散布します」

「それでよい。

ただし、荒野には内密で事を運べ。

お前にならそれができよう」

「むろんであります」

「いい返事じゃ。

さあ、もっと、飲め」

川上は茶碗の焼酎をまた一気に飲み干してから、

「ひとつ教えてほしいことがあります」

「なんじゃ、いまやお前は、荒野の奴隷でも、荒野の傀儡でも、荒野の太鼓持ちでも、荒野の糞拭きでもない。

何でも聞け、わしが一言云えばお前は百を理解するであろう」

「荒野さまはどうして、世界壊滅を企むのでしょうか。

何年共にいても、そればかりは解りません」

「わしにも解らん。

解らんが、かつてはこう思っておった。

荒野は政治、宗教、芸術など、どの分野でも卓越した能力を発揮して来た。

その自分がいずれ死ぬと云うことが我慢できない、納得できない。

ならばいっそ世界が共に死ねばよい、とな。

自己愛とやらが強いじゃ。

ラ・ロシュフコーいわく。

【自己愛こそはあらゆる阿諛追従の徒の最たるものである】

だが、いつからか、わしも考えが変わって来てのう。

荒野は、何とか、己も家族も、世界の人々も救いたかったのではないか。

だが、政治でも、宗教でも、芸術でも、自己も他者も救えなかった。

逆に、政治・宗教・芸術のトップにしながら、醜悪なシーンばかり見させられて来た。

嫉妬、羨望、蔑視、差別、格差、虐待、敵意、憎悪、怨恨、強欲、不正、不義、不倫、不当、不備、ありとあらゆるこの世の悪が、荒野の過敏な精神と神経を烈しく逆撫でし追い詰めた。

救われないのみならず荒野は、底無しの泥沼に嵌り込んだ思いじゃったろう。

おそらく荒野は、こんな世界を創った神に復讐しようとしたのではないか。

アリストテレスいわく。

【卓越した精神には狂気の混入はまぬがれえない】

まあ、これは好意的な見方だが、わしは性善説を信じるクチでな。
ちよいとこれを読んでみてくれ」
川上は（ページを開いた）一冊の本を渡された。

【僕は一人でいても、やはり死の恐怖を感じた。僕は恥を忘れて告白しなければならぬが、無気味な死の恐怖のために夜半ベッドの上に起き上がったことも一度や二度ではなかったのだ。少なくとも起きてすわっていることが何か生きているしるしであり、死んだ人間はすわることもできぬだろうと、僕は真面目にそんなはかない言い訳を考えていた。そのころの僕は、いつも異境のただ偶然に与えられた部屋の中で起き伏ししていたのだ。病気にでもなると、異境の冷酷な部屋は、かかわりあいになったり巻き添えをくってりするのを恐れるかのように、容赦なく僕を孤独へ突き放した。僕は一人すわっていた。おそらく、僕はひどくおっかない顔をしていたのに違いない。僕に親しく話しかける勇気が、部屋の家具や道具類にはどうしても出てこぬらしかった。

僕たちにとって、死の恐怖は強すぎるに違いないが、それでも本当は僕たちの最後の力だと、僕はそんなふうに考えている】

「リルケの『マルテの手記』の一節じゃ。

荒野もこれくらい素直で謙虚になることじゃよ」

「ありがとうございます、いろいろ解った気がします」

読み終えた川上は素直に云った。

「お前は天才科学者なのに、素直で謙虚で、なかなか魅力的な人物だのう。

居るだけでなぜか無聊が慰められる。

もちっとここに居れ、もちっと飲んでいけ」

「お言葉は有難く頂戴しますが、これからただちに実行に移しますので失礼いたします」

川上は深く一礼すると、あばら家を離れた。

「焼酎に入れた、催眠誘導剤の効果は、二十四時間。

まあ、間に合うじゃろ」

つまみを啣えながら陽羅は独り言ちた。

二〇三〇年、十二月十一日、午前七時。

麻暮と郷田と金之助は、郷田邸の門前で空を仰いでいる。

天気予報は大はずれで、（おそらく湘南だけ）大雪が降っていた。

すでに十センチは積っている。

「決行よね」

と、郷田が念押しする。

「決行です」

麻暮が力強く云った。

金之助が電気自動車に乗り込んだ。

郷田のBMWではなく金之助の電気自動車にしたのは、電気自動車はあらかじめスノータイヤを付けていたからだ。

景気づけよ、と云って麗子が麻暮と郷田にワインを、金之助にグレープジュースを持って来た。

三人はそれを飲み干し、麻暮は麗子に、

「丈夫な子を産んでくれ」

と、ひとことだけ伝えた。

麗子にはそれで充分だった。

麗子は昨晚から五時間かけて覚悟した。

(もしこのまま正作さんに会えなくなっても、百年後にはきっとまた会えるはず)と己に云い聞かせた。

電気自動車は出発した。

途中交通事故による渋滞にぶつかったので、江ノ島到着は九時近かった。

金之助は、江ノ島大橋の手前でクルマをとめた。

郷田は、予定通り山風へメールを入れた。

ゾンビを元の人間に戻せるクスリがゲットできたら、それを散布するヘリコプターの手配をお願いしますか、と云う内容である。

するとすぐに、まったく予想もしていなかった答が戻って来た。

未来計画カンパニーのマークを付けたヘリコプター数機が、全国の主要都市で、ゾンビを元の人間に戻せるクスリを散布していると云うのである。

郷田は山風のメールを麻暮と金之助に見せた。

麻暮はそれを見ながら、思案を巡らせた。

(こんなことを、荒野や川上がするはずはない)

だが、やらせることはできる。

師匠得意の催眠術なら。

「いったいどういうことでしょうね」

金之助が首を傾げると、ケケケ、と麻暮は笑った。

「ボクの師匠がネットなどに、〈D 2号〉撲滅キャンペーン、及びゾンビ退治作戦を開始したと流しています。

師匠の力を解っている荒野がそのことを知って、黙っているわけではないでしょう。

荒野に命じられて川上が、おそらく福島に行ったんでしょうね。

そして飛んで火に入る夏の虫、いや冬の蠅になったんでしょう。

師匠の催眠術と、師匠が開発した催眠誘導剤なら、こんなことは朝飯前」

へーえ、と金之助は感心して、

「となると、自分たちは決行しなくてもいいことになりますね」

でもさあ、と郷田が云った。
「ゾンビ対策がもしこれで済んだとしても、荒野大人対策はちっとも済んじやないもんね」
なるほど、と金之助は頷いた。
「自分たちの決行が、一本化されたと云うことですね。
荒野退治一本」
ケケケ、と麻暮は笑った。
「これでいいのだ。
師匠よ、ありがとう。
これで、ボクたち決行者、あるいは犠牲者も一本化されたわけよ」
「もしかして麻暮先生は、お一人で行く気ではないでしょうね。
親父さんの仇討は、自分にやらせてください」
「仇討と云う次元では、金助さんも浮かばれまい。
ボクは、蝶子さんの存在が荒野を変えると期待した。
だが、荒野はやはり荒野だった。
ボクと金助さんは、七十年間、一心同体で荒野に立ち向かって来た。
だからこれは仇討ではなく、総決算なのよ。
金之助さんには済まないが、総決算の始末は、ボクでなければならない」
解ったわ、と郷田が云った。
「金之助さんは云えないでしょうから、代わりに云ってあげたのよ。
じゃあ、麻暮さん、行ってらっしゃい。
でも荒野大人と心中は厭よ。
これはさあ、麗子さんの代わりに云ったのよね」
「ありがとう、郷田さん。
さようなら、金之助さん。
金助さんも最期の言葉を遺したから、ボクも遺すけど、口述でね。」

【いまぞゆく
雪ふりやまず
いまぞゆく】

ケケケ、これは福士幸次郎の作ではなく、ボクの師匠の作ですよ」

麻暮はクルマを降りた。
その肩先に白い結晶がまつわりついた。
麻暮は見送ろうとする郷田と金之助を制し、降る雪のなかを江ノ島大橋を渡り始めた。
麻暮は武器を持たなかったが、いまや殺気漂うその全身が武器であった。
(嗚呼、嗚呼)

と、金之助は声にならない声を放っていた。
十日前に、金之助の父金助もああして雪の中を進んで行った。
金助の後ろ姿も麻暮の後ろ姿も、どちらもよく似ていた。
落ち武者の後ろ姿に、よく似ていた。
(親父は麻暮先生に七十年間仕えて来たのだ)
親父さんは、と金之助は思わずつぶやいていた。
「幸せ者だったじゃないか。
できれば自分もそうしたかった」
いまぞゆく、郷田も思わずつぶやいていた。
「雪ふりやまず、いまぞゆく。
まったく、麻暮さんらしいじゃないの」
雪は一瞬だけ吹雪いた。
麻暮の軀が揺れ、背中が丸くなった。
その姿勢のまま、麻暮も一瞬だけ振り向いた。
郷田にも金之助にも、鉄仮面が笑ったと見えた。
しかしそれも一瞬だった。
麻暮の軀が、降る雪の中につと吸い込まれると、あとは一面、白い世界ばかりになった。